

分詞構文について

著者	波多野 満雄
著者別名	Mitsuo Hatano
雑誌名	白山英米文学
号	38
ページ	19-39
発行年	2013
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004437/



分詞構文について

波多野 満 雄

はじめに

英語には分詞構文と呼ばれるものがある。例(1a)のように現在分詞や例(2a)のように過去分詞が節の内容を表し、基本的に主節に対して副詞的な修飾語としての働きをする構文のことである。しかし、この構文は、単に副詞的従属節の働きをするだけではなく、主節と多様な関係を生み出すことが出来る。この主節との多様な関係から、必然的に分詞構文は多くの意味を表すことになるのであるが、それぞれの英文においてどの様な意味を表すことになるかは色々な要素が絡み合っ
て決定される。本稿の目的は分詞構文が主節とどの様な関係で結びついているのか、また分詞構文の表す意味決定にはどのような要素が関わっているのかについて考察することである⁽¹⁾。

(1)a. Seeing the approaching policemen, he hurried forward. (BNC⁽²⁾)

(その近づいてくる警官を見て、彼は先へと急いだ)

b. Seen from the side, they are at first glance very similar indeed. (BNC)

(横から見ると、それらは一見したところでは本当によく似ている)

1. 分詞構文の形態的特徴

この章では分詞構文の形態的特徴について考察する。分詞構文は前述のように主節を副詞的に修飾する役割を担うわけであるが、純然たる従属節とは形態的に異なる点がある。以下、まずはその基本的な特徴から見てゆく。

1. 1 分詞構文の基本的形態

従属節と比較した場合の分詞構文の基本的な形態的特徴は、例(2a)のように接続詞が無いこと、例(3a)のように主語が無いこと、そして動詞が、例(4a)のように現在分詞や例(5a)のように過去分詞となることである。これらの基本的な形態を有する分詞構文の使用頻度が圧倒的に多い。しかしながら、使われる頻度は上

記の基本のもの程高くないが、例(2b)のように分詞の前に接続詞があるもの、例(3b)のように主語があるものもある。また同じ動詞を用いた分詞構文でも、例(4a)のように進行相の意味を持たない場合と、(4b)のように持っている場合があり、両者の間に形態的相違は生じない。さらに、例(5a)のように過去分詞が分詞構文に用いられた場合、それは受身の意味なので、実際にはその前にbeingがあってもいいのであるが、通常省略される。しかし、例(5b)のようにbeingが省略されないものも存在する。このように基本の形態から逸脱するものが多いが、これらについては別に章を設けて考察してゆく。

- (2)a. Born in 1930 in Southport, he was schooled in his home town before studying chemistry at Liverpool University. (BNC)
(彼は1930年にサウスポートで生まれ、地元で教育を受けた後、リバプール大学で化学を学んだ)
- b. Eubank started his career in New York eight years ago, although born in Britain. (BNC)
(ユーバンクは8年前にニューヨークで活動を開始した。生まれは英国なのだが)
- (3)a. Turning away, Keith raised his voice. (BNC)
(顔をそむけると、彼は声を張り上げた)
- b. All things considered, she would be better married. (BNC)
(あれこれ考えれば、彼女は結婚したほうがよいだろう)
- (4)a. Walking along to her room, she quietly closed the door. (BNC)
(ずっと部屋まで歩いて行って、彼女は静かにドアを閉めた。)
- b. Walking to the door, Sabine wondered detachedly what the reaction would be if she voiced her unspoken thought aloud, but decided not to risk it. (BNC)
(ドアの方へと歩きながら、セイバインは、もし自分が秘かな思いを口に出したらどんな反応が返ってくるだろうかと冷静に考えたが、そんな危険は冒さないことに決めた)
- (5)a. Not satisfied, Harriet asked her to get in touch with her brother as she would like to see him. (BNC)
(満足できず、ハリエットは彼女に、会いたいので、兄弟に連絡を取ってくれるよう頼んだ)
- b. The judgment not being satisfied, the bank presented a bankruptcy petition against B alone for the whole debt. (BNC)
(その債務は履行されなかったので、銀行はBに対してのみ、全借財に対す

る破産の申し立てを行った)

1. 2 完了形

分詞構文には、同じく準動詞である例(6a)のto不定詞や例(6b)の動名詞のように完了形が存在する。準動詞の完了形の基本的な機能はいずれも述語動詞の表す時よりも前の時を表すことであり、例(6a-b)同様、分詞構文の完了形である例(7a-c)においても主節の述語動詞の表す時よりも前の出来事を分詞が表している。

- (6)a. I spoke to you yesterday about it, but you don't seem to have heard me. (BNC)
(私は昨日それについて君に話したけれど、君はどうも聞いていなかったようだね)
- b. Suddenly she felt angry with herself for having let her emotions get out of control. (BNC)
(突然彼女は、感情を爆発させてしまったことに対して自分自身に腹が立った)
- (7)a. The French, having been victims of German occupation, were much less certain about this policy. (BNC)
(フランス国民は、ドイツの占領による犠牲者だったので、この政策に関してははるかに自信がなかった)
- b. He was the eldest son, his two brothers having been killed in the Great War. (BNC)
(彼は長男で、彼の二人の弟は世界大戦で亡くなっていた)
- c. Thieves, having stolen a car, take it for a joy ride and then strip it before setting it alight to destroy the evidence. (BNC)
(泥棒たちは、車を盗むと、まずはしばらく乗り回し、それから部品を取り外した上で証拠隠滅のために火を付ける)

準動詞の完了形は例(8a)のto不定詞および(8b)の動名詞のように、述語動詞の表す時より前の時を表すだけではなく、完了相の意味でも用いられる。分詞構文の場合も同様であり、例(9a)の場合、分詞構文中にalreadyがあることから「完了・結果」の意味を表していることが分かる。また例(9b)の場合、two or three timesから、例(9c)の場合、for some daysから、それぞれ「経験」および「継続」の意味を表していることが分かる。

- (8) a. Much of it now seems to have already been burned. (BNC)
 (その多くが今はもうすでに燃やされてしまったようである)
- b. Unfortunately, the reported effect on some of the older generation is to make them regret having lived so long and apologize for their need to call on more services than do younger people. (BNC)
 (残念なことに、年配の世代の何人かに対する影響は、報告によれば、長生きしたことを後悔させ、若者よりも公共サービスに頼る必要があることを申し訳なくおもわせることだった)
- (9) a. The group now plans to concentrate on Europe, the US and Japan, having already closed offices in Hong Kong and Singapore. (BNC)
 (そのグループは今やヨーロッパ、アメリカそして日本に集中することを計画している。既に香港やシンガポールの事務所は閉鎖してしまっているのだ)
- b. I knew Washington quite well, having visited it two or three times while I was at Amherst in 1969. (BNC)
 (私はワシントンをとってもよく知っていた。1969年にアマーフトにいた時に二、三度訪れたことがあったのだ)
- c. Having studied these on and off for some days, what is your opinion? (BNC)
 (これらを断続的に何日か調査してきて、現在のあなたの意見は)

大変稀な例であるが、例(10)のように完了進行形の分詞構文も存在する。例(10)の場合、継続の意味が強調されることになる。

- (10) Anyway, they know each other pretty well, having been living together for two years now. (BNC)
 (いずれにせよ、彼らはお互いのことを非常によく知っている。もう2年もずっと一緒に暮らしてきたからである)

1. 3 否定形

分詞構文の否定にはnotやneverなどが用いられる。基本的に否定辞は例(11a-b)および例(12a-b)のように分詞の直前、つまり、節の一番前に置かれるが、neverが完了形の分詞構文で用いられる場合、例(12c)のようにneverがhavingと過去分詞形の間に入れられることもある。

- (11)a. He sat and looked at her, not knowing what to say next. (BNC)
 (彼は座って彼女を見た。次に何を言えばよいのか分からなかったが)
- b. His eyes kept looking away over one of my shoulders or the other, never meeting my gaze, (BNC)
 (彼は眼を私の肩越しにあっちこっちへ逸らし続けた。そして、私がじっと見るその眼に決して視線を合せなかった)
- (12)a. ‘What is Sir Guy like?’ she queried curiously, not having been present in the hall when their visitor had arrived. (BNC)
 (「ガイ卿はどんな方ですか」と彼女は興味ありげに尋ねた。訪問客達が到着した時彼女はホールにいなかったのだ)
- b. Never having been to London before, all my notions came from newsreels and movies like Oliver Twist, Sherlock Holmes and Mary Poppins. (BNC)
 (ロンドンには行ったことがなかったので、私の頭の中の考えは全て、ニュース映画やオリバー・ツイスト、シャーロック・ホームズ、そしてメアリー・ポピンズのような映画から得たものだった)
- c. I asked her if she did not feel deprived, having never experienced school life. (BNC)
 (恵まれていないと感じていないか私は彼女に尋ねた。彼女が学校生活と言うものを経験したことがなかったからだった)

2. 分詞構文の表す意味・機能

前章で述べたように分詞構文は内容的には節に相当する。従って分詞構文が使われた文中には主節を合わせて二つの節が存在することになる。一文中に複数の節が存在する場合、通常その節同士の関係を示すために接続詞が用いられる。しかし、分詞構文には基本的に接続詞が無い。よって主節との意味的関連がはっきりしないということになる。このため話し言葉では分詞構文の使用が避けられる傾向がある。しかし、接続詞が無い構文を話し手や書き手が敢えて選んで使っているのであり、逆の見方をすれば、意味的関連を明示せず曖昧にするのが分詞構文の特徴ということになる。例えば例(13)の分詞構文は主節に対して「時」「原因・理由」「継起」などの意味を表しえる。接続詞があれば、意味関係が明示されることになるが、逆に意味関係がひとつに限定されることにもなる。意味関係をひとつに限定せず、複数の意味を曖昧かつ複合的に表したのが分詞構文と言える。従って、具体的な分詞構文の英文を意味関係別に分類するのは意味の無いことなのかもしれない。しかしながら、分詞構文は主節と何らかの関連のある事

柄を述べているのであり、聞き手、読み手はその関連性を読み取ろうとするものである。意味関係が複数考えられ、どちらとも言えない場合がでてくる可能性は常にあるが、典型的な関連性としてその意味を抽出し、考察するのは意義があることと思われる。

- (13) Seeing the approaching policemen, he hurried forward. (=1a)

(その近づいてくる警官を見て、彼は先へと急いだ)

2. 1 付帯状況

主節の出来事を主要な状況とした際、分詞構文で付帯的、二次的な情報を述べる場合を言う。二次的な情報という言い方は多分に曖昧で、実際には2.2～2.5までに取り上げる典型的な意味・役割から外れるものは全てここに入ることになると言ってもよいかもしれない。

2. 1. 1 継起

主節と分詞構文で表される二つの出来事を、起こった時間順に並べたものであり、一連の出来事であることが多い。関連すると思われる二つの出来事が表現された際、時間順というのは人が自然に想像し、受け入れることのできる関係と思われる。例(14a-b)は分詞構文が主節の前に来た場合であり、例(15a-b)は主節の後に来た場合、そして例(16a)は主節の中に来た場合である。例(16b)では主節を挟んで前後に分詞構文があり、やはり継起順に出来事が述べられている。

- (14)a. Looking up, he gave his sister a faint smile. (BNC)

(見上げると、彼は妹にかすかに微笑んだ)

- b. Turning, she searched the crowds for a glimpse of him. (BNC)

(振り向いて、彼女は一目だけでも見ようと群衆の中に彼を探した)

- (15)a. He suddenly swung her up into his arms, looking down at her with burning eyes.

(BNC)

(彼は突然さっと彼女を腕の中に抱え入ると、情熱的な目で彼女を見下ろした)

- b. Mrs Archer sniffed and shrugged her shoulders, admitting that the money was good. (BNC)

(アーチャー夫人は鼻を鳴らし、両肩をすばめ、そのお金は十分なものであると認めた)

(16)a. Rupert, left alone with Ianthe and Penelope, found himself heaving a sigh of relief, flopping down into a chair, and suggesting a cup of tea. (BNC)

(ルパートは、アイアンシーとペネロペの三人だけになると、安堵のため息をついている自分に気付き、ドスンと椅子に腰掛け、紅茶を飲もうと提案した)

b. Now, arriving in the safety of her own room, Maggie undressed, folding her clothes and putting them away with an unusual neatness for a fifteen year-old. (BNC)

(今や自分の部屋という安全地帯に到着し、マギーは服を脱ぎ、14歳にしては普通でない手際でそれらをたたみ、片づけた)

2. 1. 2 同時生起

同時に起きている出来事を表す際に用いられ、一方に焦点を当てた言い方で、談話分析の観点から言うと、基本的には主節に焦点が当てられ前景となり、分詞構文が背景となる。例(17a)のように主節の前に位置するもの、例(17b)のように主節の主語の直後に位置するもの、そして例(18a-b)(19a-b)のように主節の後に来るものがあるが、主節の後に来る場合、例(18a-b)のようにカンマの無いものと例(19a-b)のように有るものがある。これらの位置関係やカンマの有無が意味にどのような影響を与えるかについては次章で考察する。

(17)a. Walking to the door, Sabine wondered detachedly what the reaction would be if she voiced her unspoken thought aloud, but decided not to risk it. (=4b)

b. Ben, whistling happily, serviced his car in preparation for the long drive North. (BNC)

(ベンは、楽しそうに口笛を吹きながら、北への長距離ドライブのための準備のために車の点検をした)

(18)a. I spend days walking and looking for compositions. (BNC)

(私は何日もかけて歩き回り作品を探した)

b. Frankie sat calmly on the sofa reading his comic as though nothing was happening. (BNC)

(フランキーはまるで何事も起こっていないかのように漫画を読みながら静かにソファに座っていた)

(19)a. Manville fidgeted nervously, chewing at his bottom lip. (BNC)

(マンヴィルはそわそわと落ちつきがなかった。下唇を噛みながら)

- b. She walked round him, whistling, but he didn't stir. (BNC)

(彼女は彼の周りをぐるっと歩いた。口笛を吹きながら。しかし彼は身じろぎしなかった)

2. 1. 3 追加的状況・説明

主節と分詞構文で表している出来事が、連続で起こっているわけでも、同時に起こっているわけでもなく、また2.2以下で扱う「時」・「原因・理由」・「譲歩」「条件」などの意味関係が存在するわけでもなく、ただ単に主節と関連した情報を分詞構文の形で追加的に表していると言えるものがある。前置詞でその関係を表すのが難しい場合もあり、この用法が分詞独自の使い方になると言えるかもしれない。例(20a-b)は主節に付随した状況を追加的に表しており、例(21a-b)は主節で大雑把に述べた事柄を具体的に説明している。また例(22a)はひとつの行為の持つ意味を別な角度で説明しており、例(22b)は手段を表し、例(22c)は発言者の発話時の発話の前提(=立場)を表している。

- (20)a. Adele turned away, apparently satisfied, and Isabel shrank back on the bench, half hidden by Adele's body as the other girl leaned forward to hear what was going on. (BNC)

(アデルは顔をそむけた。どうやら満足しているようだった。そしてイザベルは座っていたベンチで身を縮めた。半分アデルの身体の陰に隠れた状態で。その時アデルの方は何が起こっているのかを耳で確かめようと身を前に乗り出したのだ)

- b. Sabatini had sympathy for her, admitting that she went through the same ordeal before winning the US Open in 1990. (BNC)

(サバティーニは彼女に対して同情していた。彼女も1990年に全米オープンで勝つまで同じ試練を経験したと告白していたのだ)

- (21)a. Mr Major spoke again, praising the Chancellor's handling of the crisis.

(メジャー氏は再び話し始め、その大臣の危機への対処を褒め称えた)

- b. A man of independent means, Barton travelled widely, visiting France and Italy and possibly venturing as far afield as Poland and Russia, and pursued interests in economics and botany. (BNC)

(遊んで暮らせる資産を持っていたので、バートンはあちこち旅行した。フランスやイタリアを訪れ、思い切ってポーランドやロシアといったはるか遠くまで行き、経済や植物学に関する自らの興味を満足させた)

- (22)a. 'I hope you're satisfied,' Nora said, breaking the silence at last. (BNC)

(「満足していただけるといいのですが」とノラは言い、ついに沈黙を破った)

- b. The series runs from January to December 1992 and you can order using the coupon on page 85. (BNC)

(そのシリーズは1992年の1月から12月まで続くので、85ページのクーポンを使って注文できます)

- c. Having seen you perform tonight, I would guess that you still enjoy playing live. (BNC)

(あなたが今夜演奏するのを拝見しましたが、依然としてあなたはライブの演奏を楽しんでらっしゃると私には思えます)

2. 2 時・場合

ある出来事が起こる時や場合を表すもので、例(23a-d)のように分詞構文に接続詞のwhenと同じ、「時・場合」の意味が感じられるものである。

- (23)a. Arriving in Coober Pedy at sunset, I noticed the desert sky was streaked with red like a fire opal. (BNC)

(クーバー・ピーディーに日没時に着いて、私は砂漠の空がファイアーオパールのような赤色の縞模様で染まっているのに気が付いた)

- b. Seen from the side, they are at first glance very similar indeed. (=1b)

- c. Watching Laura, it is hard to believe that one year ago this chubby child from Manchester with the tangle of blonde curls was a jaundiced, wasted waif, waiting to die. (BNC)

(ローラを見てみると、一年前にはマンチェスター出身のこのまるまる太って、もじゃもじゃの金髪の巻き毛の子が黄疸にかかってやせ衰えた浮浪児で、死を待つばかりであったとは到底思えない)

- d. Driving over the wide crossroads, for the second time, without another car to be seen, she had a vision of herself driving around all night. (BNC)

(車で道幅の広い十字路を渡った際、二度目なのだが、あたりに他の車は見当たらなかったのも、彼女は一晩中自分があちこちドライブしているのだという錯覚を起こした)

2. 3 原因・理由

分詞構文に接続詞のbecause, as, sinceなどと同じ「理由」の意味が感じられるものである。主節と分詞構文の二つの出来事を起こった時間順に並べた「継起」に

については既に述べたが、この「原因・理由」はその延長線上にあると言える。二つの出来事が一連の出来事である場合、前に起こったことが原因・理由となって後の出来事がその結果として起きることが多い。継起すると考えられる二つの出来事が述べられた場合、そこにはこの「原因・理由」の意味が生じることが多くなる。複数の出来事を並べて述べる場合、時間順に並べるのが自然のように、原因・理由とその結果を述べる場合も例(24a-c)のように原因・理由を表す分詞構文が主節の前、あるいは主節の主語の直後に来るのが自然である。しかしながら、例(25a-c)のように主節の後に来る場合もある。その場合は原因・理由を追加的・補足的に付け加えた感じの文となる。また、先ほど述べたように、「原因・理由」は「継起」の延長線上にあるので、文によっては例(26)のseeingように「継起」の意味はあるが、「原因・理由」の意味も含まれるかどうかは微妙なものも存在することになる。

(24)a. Now, badly wounded, he had been taken prisoner. (BNC)

(ひどい怪我をしていたので、彼は今や捕虜になってしまっていた)

b. Feeling a little embarrassed, he quickly cleared his throat and glanced up at the clock. (BNC)

(少し気づまりだったので、彼は素早く咳払いをして時計をちらっと見た)

c. Diodorus declares bluntly: "The slaves, distressed by their hardships and frequently outraged and beaten beyond all reason, could not endure their treatment"(BNC)

(ディオドロスはきっぱりと断言した:「奴隷たちは、数々の苦難に苦しみ、不合理にも頻繁に侮辱され殴られ、自分たちへの扱いに耐えられなかったのだ」)

(25)a. The coach door remained closed; she rapped on the window, seeing a still figure seated inside. (BNC)

(そのバスのドアは閉まったままであった。彼女は窓をトントンと叩いた。バスの中に席に座ってじっと動かない人影が見えたのだ)

b. He glanced at her, quickly, recognising the distaste in her voice. (BNC)

(彼は彼女をちらっと見た。素早く。彼女の声に嫌悪の感情を感じ取ったからである)

c. The murderer was meanwhile standing, shocked at what had happened, but still holding the gun. (BNC)

(殺人者はその間ずっと立っていた。起こったことにショックを受けて、しか

し、依然として銃は持っていた)

- (26) He looked around and, seeing himself alone, got on his knees: his eyes closed, his head tight with exhilaration. (BNC)

(彼はあたりを見回した。そして、自分一人なのを見てとって、跪いた。両眼を閉じ、頭は陽気な気分一杯だった)

過去分詞が用いられた分詞構文に通常省略されるbeingが補われると、例(27a-b)のように「原因・理由」の意味になることが多いと一般に言われている。同様なことは例(27c)のようないわゆる無動詞節にbeingを補った場合にも当てはまる。これは何故であろうか。それを解くカギはbeingが何のために付けられるのかということである。Beingを付けるということはそれが分詞構文であるということ、つまり主節に対して文修飾の副詞として機能していることを明示しているのだと考えられる。Beingが無い過去分詞や無動詞節の場合、主節の主語を修飾する語句として働く可能性があるのである。例えば例(28a)ではsensible manはbeingが付いていないことにより、主語と同格語句と解釈され、主節全体ではなく、主語のみを修飾している解釈が生まれるし、例(28b)ではwoundedはbeingが付いていないことで、例(28c)のwoundedのように擬似補語としての働きをしているとの解釈が生まれるのである。例(29a-b)のようにbeingを補ったからといって、必ずしも分詞構文が「原因・理由」の意味になるわけではないが(例(29a)は「追加的状況」、(29b)は「主節の説明」を表している)、beingを付加するということで少なくとも文修飾としての資格が与えられ、それによって主節全体に対する「原因・理由」の意味が生じやすくなるのではないと思われる。

- (27)a. I felt a right idiot, being carried out on a stretcher, everybody gawping at me. (BNC)

(私は自分が全くの道化になったような気がした。担架で運び出されたからで、皆がポカンと口を開けて私を見ていた)

- b. She waved, but Dawn didn't see her, being too engrossed in stuffing the flowers into a large carrier bag. (BNC)

(彼女は手を振った。しかし、ドーンは彼女の姿を見なかった。花を大きな買い物袋に詰め込むのにあまりに没頭していたからだった)

- c. 'That's because, being a stranger to the emotion, I didn't recognise it.' (BNC)

(それは、私がその感情に疎かったので、それと気づけなかったためである)

- (28)a. Didn't Hansen, sensible man, indicate from the start that he has no interest in

management? (BNC)

(物分かりの良いハンセンは始めから経営には興味が無いと言っていませんでしたか)

- b. 'Heyy...' he complained, wounded. (BNC)

(「ヘーイー、・・・」と彼は訴えた。怪我した状態で)

- c. In 1917 Maxwell returned from France badly wounded and with an MC. (BNC)

(1917年マックスウェルは、重傷を負ってそして戦功十字勲章を持って、フランスから帰ってきた)

- (29)a. Mortimer crash-landed this, also being slightly injured. (BNC)

(モータィマーはこれを不時着させた。そして彼もまた軽傷を負った)

- b. The devastation was tremendous, hangars and workshops being badly smashed. (BNC)

(その荒廃は凄まじいものであった。格納庫や作業場はめちやくちやに破壊されていた)

2. 4 譲歩

分詞構文に接続詞のthough, althoughと同じ、「譲歩」の意味が感じられるものである。この意味が生ずるかどうかは最終的には文脈で判断するしかないが、例(30a)のstill(「依然として」)や例(30b)のnevertheless(「それにもかかわらず」)など、逆接を表す可能性のある言葉が主節にある場合この意味が生ずる可能性が高まると言える。また、例(31)のように分詞構文が主節の後に来て、追加的に主節とは逆接的な内容の出来事が述べられる場合もある。この場合、「譲歩」というより「逆接」という方がよいかもしれない。いずれにせよ、分詞構文の表す意味の多様性を示す一例と言える。

- (30)a. You can't believe that they can still say it, having had this conversation six hundred times. (BNC)

(信じられないだろうけど、彼らはまだその話を持ち出せるんだよ。そんな話これまでに600回もしてるというのに)

- b. Admitting that the incident "brought shame and dishonour upon the police profession", the Los Angeles police chief, Daryl F. Gates, nevertheless refused to accede to demands for his resignation. (BNC)

(その出来事が「警察に恥と不名誉をもたらした」ことは認めたが、ロサンジェルス警察の署長、ダリル・F・ゲイツはそれにもかかわらず自分への辞任要

求に同意しなかった)

- c. Douglas, disappointed, had of course been prepared for this also, and wasted little time in cursing. (BNC)

(ダグラスは、失望してはいたが、もちろんこのことに対しても準備をしていたのでいつまでも悪態をつくことはなかった)

- (31) She hovered for a second, selecting the right words. (BNC)

(彼女は一瞬迷ったが、適切な言葉を選んだ)

2. 5 条件

分詞構文に接続詞のif, even ifと同じ、「条件」の意味が感じられるものである。この意味が生ずるかどうかはやはり最終的には文脈で判断するしかないが、例(32a-b)のcan, wouldのように条件文の帰結節で頻出する助動詞が大きな目安になりえる。

- (32)a. A case-study can be carried out, using almost any method of research, though the less statistical methods are usual. (BNC)

(事例研究は実行可能である。ほとんどどの調査法を使つたとしても。といっても、統計をあまり用いない方法のほうが普通ではあるが)

- b. Recognising that the NHS is much more fragmented than a large company, it would be highly desirable to bring human resource professionals and senior managers together across London to think through how to share best practice and learn from one another as the changes unfold. (BNC)

(国民健康保険制度は大企業と比べてはるかにばらばらだと言うことを認めるならば、ロンドン中から労働力の専門家や会社の幹部を集めて、最高の実践例の共有方法や変化が明らかになった場合のお互いに学びあう方法を徹底的に考えさせるのが大変望ましいでしょう)

3. 分詞構文の位置と情報構造

分詞構文は主節に対して様々な位置を取りえる。基本的なものは、主節の前、主節の中、特に主語の直後、そして主節の後、である。この分詞構文の置かれる位置と2章で考察した分詞の表す意味の間には絶対的な規則は存在しない。しかし、大雑把ながら傾向と呼べるものは存在するように思われる。以下この分詞構文の位置自身が持つ意味はどんなものか、そしてこの位置と分詞構文が表す意味の間にどのような関係が存在するのかを考察してゆく。

既に述べたように、基本的に分詞構文は主節を副詞的に修飾する文修飾副詞節に相当する。よって情報的には主節の方がより重要である。情報構造的に、より大事な情報が後ろに来る傾向があるので、分詞構文が前にあり、主節が後ろに来る構造が基本の形になる。よって2章で考察した「時」「原因・理由」「譲歩」「条件」など従属節としての役割がはっきりしている場合、この位置関係が一番安定した分かりやすい、関連性を強く意識させる言い方となる。また、「付帯状況」の中でも「継起」の場合、出来事が起こった順に述べられるが、分詞構文の内容が軽く、主節の方に焦点が置かれた場合、この位置関係が採用されると思われる。二つの出来事が「同時生起」に起こっている場合もやはり情報価値の低い方が分詞構文となり、前に来る傾向がある。

次に主節の中に来る場合と主節の後に来る場合についてであるが、分詞構文におけるこれらの位置と意味の関係は例(33)-(36)のように関係代名詞の非制限的用法の場合と類似したものと思われる。どちらも統語的な関係はあるものの、意味的な関係を示す語句が無い二つの節を並べているという点で同じであり、二つの節を結びつけようとする際の人の心の働きが同じものであるからと思われる。分詞構文の位置と意味の関係を考察する前に、まず、この関係代名詞の非制限的用法の位置と意味の関係について見てゆく。

非制限的用法の関係代名詞節の果たす意味的な役割には付加的、補足説明的記述の場合と主節と同様な重要度で伝えられる情報の場合がある。そして、非制限的用法の関係代名詞節があらわれる位置には文中にくるものと文末にくるものがあるが、文中にくるものは基本的に例(33a-b)の「譲歩」、例(34a-b)の「追加的状況」のように、先行詞に対する付加的、補足説明的記述である。一方、文末に来た場合、例(35a)の「理由」、例(35b)の「追加的状況」のように、付加的・補足的説明となる場合と、例(36a-b)のように主節と同様な重要度で伝えられる情報の場合があり、後者の場合、関係代名詞は「and+代名詞」で書き換えた場合とほぼ同じと言える。

- (33)a. Webb-Bowen, who had raised his gavel, let it fall back gently into place. (BNC)
(ウェブ・ボウエン、彼は小槌を持ち上げたが、優しく、所定の位置に戻した)
- b. Free elections, which could result in the Communist Party being reduced to playing a junior role, are seen as the only realistic way forward to end East Germany's political and economic crisis. (BNC)
(自由選挙、これにより共産党は大した役回りができない羽目になってしま

うかもしれないが、それは東ドイツの政治的、経済的危機を終結に向かわせる唯一の現実的方法であると見なされている。)

- (34)a. The robber, who had a skinhead haircut, took £30 and a rail ticket. (BNC)
(その強盗は、スキンヘッドであったが、30ポンドと列車の切符を奪った)
- b. Her father, whom she adored, had collapsed the previous September with a cerebral haemorrhage and had lain in a coma in the National Hospital in Queen Square, London, for nearly four months. (BNC)
(彼女の父、彼女の敬愛する父なのだが、前年の9月に脳出血で倒れ、昏睡状態のまま、ほとんど4ヶ月の間ロンドンのクウィーンスクエアーにある国立病院にいた)
- (35)a. Protein is important as the source of the raw materials for building up and repairing our body tissues and our enzymes, which are largely protein. (BNC)
(プロテインは我々の肉体組織と酵素を作り上げ補修するための原材料として重要である。なぜならそれらはほとんどプロテインで出来ているからである)
- b. In November 1987 Noboru Takeshita became Prime Minister following the retirement of Yasuhiro Nakasone, who had led the LDP since 1982. (BNC)
(1987年11月、竹下登は中曽根康弘の引退の後、首相になった。中曽根は1982年から自民党を率いていた)
- (36)a. She mentioned the matter to Christopher, who showed some anger. (BNC)
(彼女はその件をクリストファーに話した。すると彼はいくらか怒りを見せた)
- b. There was a delicious ice-cold soup with tostones, croutons, chopped pimiento and chopped cucumber, which were added as it was served. (BNC)
(実にうまい氷のように冷たいスープがあったが、それにはトストーネ、クルトン、刻み赤ピーマンに刻みキュウリが付いていて、それらは給仕される際にスープに加えられた)

分詞構文の場合も関係代名詞の場合と同じように主節の中にある場合は構造的にも主節の内部に取り込まれており、例(37a-b)のように意味的に従属的な立場になる。また、主節の後にきた場合も関係代名詞と同じく、意味的に従属的な立場になる場合と、主節と対等な立場になる場合がある。「時」「原因・理由」「譲歩」「条件」など従属節としての役割がはっきりしている分詞構文の場合、例(38a-b)のように、それは追加的・補足的に述べたことになる。また、付帯状況のなかでも「同時生起」や「追加的状況・説明」の場合も例(39a)のようにこれにあたる。一

方で「継起」の場合は例(39b)のように主節と同等の情報価値があるものとして述べられていると考えられる。

- (37)a. The French, having been victims of German occupation, were much less certain about this policy. (=7a)
b. Douglas, disappointed, had of course been prepared for this also, and wasted little time in cursing. (=30c)
- (38)a. The coach door remained closed; she rapped on the window, seeing a still figure seated inside. (=25a)
b. A case-study can be carried out, using almost any method of research, though the less statistical methods are usual. (=32a)
- (39)a. Adele turned away, apparently satisfied, and Isabel shrank back on the bench, half hidden by Adele's body as the other girl leaned forward to hear what was going on. (=20a)
b. He suddenly swung her up into his arms, looking down at her with burning eyes. (=15a)

次に「同時生起」の場合のカンマの有無について考察する。2.1.2で既に述べたように「同時生起」の意味の分詞構文が主節の後に来る場合、例(40a)のようにカンマが無い場合と例(40b)のように有る場合が存在する。カンマが無い場合、分詞は主節と一体になっており、例(41)のreadingのように主節の主語を修飾する擬似補語としての働きを担っていると考えられる。一方、カンマが有る場合はそこで一旦文が切れることになり、意味的なまとまりもそこで切れることになる。従って、例(40b)のカンマの後のwhistleは構造的な支えを失って、主節との意味関係は文脈で判断されることになり、同時生起と判断されれば、追加的な記述と見なされることになる。尚、既に述べたように、分詞構文では情報構造的に主節の方に重きが置かれるが、「同時生起」でカンマが無く、擬似補語として働いてると思われる場合、例(42)のように分詞の方に重きが置かれる場合がある。例(42)の分詞disappointedは前にカンマが無いので、擬似補語に近い働きをしており、情報価値も高いと思われる。それが証拠に接続詞butを挟んで対立している概念はdisappointedとgladであって、disappointedが情報の焦点になっていることが分かる。

- (40)a. I spend days walking and looking for compositions. (=18a)
b. She walked round him, whistling, but he didn't stir. (=19b)

- (41) I sat reading in the lounge-bar. (BNC)
(私はラウンジバーで座って本を読んでいた)
- (42) I walked away disappointed but I was glad I'd found someone new whom I could confide in. (BNC)
(私は意気消沈して、歩いてその場を立ち去った。しかし、秘密を打ち明けることのできる人が新たに見つかってうれしかった)

4. 接続詞付きの分詞構文

分詞構文は基本的に接続詞を持たない。よって、主節との意味関係が複合的になって様々な含みを生み出すことが出来るのだが、一方では意味関係が分かりにくいという点もある。主語が無く、動詞も定型化しないという分詞構文の簡潔さを残しながらも、その分かりにくさを軽減するために接続詞を付加したものがこの形である。例(43a-c)のように主節の前・中・後のいずれにも置かれる。

- (43)a. When reading stories about Thomas the Tank Engine to my daughter, I never thought it sexist. (BNC)
(娘に機関車トーマスの話を読み聞かせている時、私はそれが性差別的なものだとは全然思わなかった)
- b. She has had skin grafts since being badly burned in the Siberian train disaster. (BNC)
(彼女はシベリアでの列車大惨事でひどい火傷を負って以来何度も皮膚移植をしている)
- c. My daughter, although clearly distressed at the tragedy, preferred to stay at home with the children. (BNC)
(私の娘は、明らかにその悲劇に苦しんではいたが、子供たちと一緒に家にいることの方を好んだ)

5. 懸垂分詞

基本的に分詞構文には主語は無く、主節の主語が意味上の主語となっており、その場合にのみ主語の省略が可能である。しかし、分詞構文の中には主語が主節の主語と違うにもかかわらず、省略されているものがある。このような分詞構文が一般に懸垂分詞と呼ばれている。ただし、省略される名詞はどんなものでも可能と言うわけではなく、例(44a-d)のように主節の主語以外のどこかに分詞構文の意味上の主語を指すような語句が存在する場合が多い。(cf. Quirk *et al.*: 1972)

この傾向は語句の省略における復元可能性の観点から考えれば当然のことと言える。例えば、例(44a)ではyourが、例(44b)ではmyが、例(44c)ではusが、例(44d)ではviewがそれぞれ分詞構文の意味上の主語を指し示していると言える。また、例(45)のように、時を表すitが省略されていると思われるものもある。更に、分詞構文の中には例(46a)のように前にある主節全体が主語となっているもの⁽³⁾、数は少ないが例(46b)のように後に来ている主節全体を主語としているものもある。いずれもこの懸垂分詞の仲間と言える。

- (44)a. Having studied these on and off for some days, what is your opinion? (=9c)
b. Never having been to London before, all my notions came from newsreels and movies like Oliver Twist, Sherlock Holmes and Mary Poppins. (=12b)
c. Walking to the tiny mountain village of Axos, there was a friendly excitement in the air as locals waved us on our way to the open air taverna. (BNC)
(アクソスという小さな山村へと歩いてゆくと、好意的な興奮の雰囲気があった。それは露店のギリシャ料理店へ行く途中地元の人たちが我々に手を振ってくれた時のことだ)
d. Although best appreciated from the ground, an aerial view is still worthwhile. (BNC)
(地上からの景色が最高であるが、空からの眺めも依然として価値があった)
- (45) At eight o'clock, Mrs Bean was still sleeping. (BNC)
(8時だったが、ビーン夫人はまだ寝ていた)
- (46)a. He paused a beat, causing her to tense in anticipation. (BNC)
(彼は少し間をおいた、それで彼女は期待で緊張した)
b. Unknown to him, his wife is a gambler, who over the years has been secretly gambling away his money and assets. (BNC)
(彼には知られていなかったが、彼の妻はギャンブラーで、ここ何年も秘かに彼のお金や資産をギャンブルですっていた)

また確立した言い回しの中には例(47a-d)のように意味上の主語が一般の人であるものが多くある。

- (47)a. Generally speaking, most Ministers rely on others for most of their ideas. (BNC)
(一般的に言って、ほとんどの大臣は自分たちの考えのほとんどを他人に頼っている)

- b. Judging from her voice, she had been crying. (BNC)
(彼女の声から判断すると、彼女はそれまでずっと泣いていたようだ)
- c. All things considered, she would be better married. (=3b)
- d. Speaking of cost, Bewdsley, can I afford to buy a hunting-box? (BNC)
(費用と言え、ビューズリー。私に狩猟小屋は買えるかな)

6. 独立分詞構文

前章で述べたように、分詞構文の主語は主節の主語と同じであり、それが省略されているのだが、例(48a-c)のように主節の主語と異なったものが分詞構文の主語となり、それが明示される場合がある。このような分詞構文が一般に独立分詞構文と呼ばれている。

- (48)a. Nonetheless the delegations met in Freetown on July 10, the NPFL being represented by spokesman Tom Woewiyu. (BNC)
(それにもかかわらず、代表団は7月10日にフリータウンで会合した。NPFLはスポークスマンのトム・バーヴィューが代表であった)
- b. Walking to the kitchen, she filled the electric kettle, her heart hammering in her chest. (BNC)
(台所に歩いて行って、彼女は電気やかんに水を一杯に入れた。彼女の心臓はドキドキしていた)
- c. This not being the case I have benefited much from the peace and quiet and from the fresh air. (BNC)
(これは本当ではないので、私は安息と新鮮な空気から多くの益を得ていた)

独立分詞構文の一種で例(49a-b)のようにwithを付けて主節に対して付帯状況の関係にあることを明示する用法がある。主節との関係を明示するという点においては、4章で考察した接続詞付きのものと同じと言える。

- (49)a. With tears running down her face, she blamed herself bitterly. (BNC)
(涙が頬を伝わって流れ落ちるがまま、彼女は自分を激しく責めた)
- b. I bet you could fly this thing with your eyes closed. (BNC)
(きっとあなたは目を閉じたままでこれを飛ばすことができるよ)

おわりに

以上分詞構文についての考察の結果をまとめると次のようになると思われる。

- ・分詞構文の基本的な形態的特徴は、①接続詞が無いこと②主語が無いこと③動詞に時制が無く、現在分詞や過去分詞の形をとることである。
- ・分詞構文は完了形や否定形の点で他の準動詞であるto不定詞や動名詞と同じような特性を持っている。
- ・分詞構文の基本的機能は従属節として副詞的に主節を修飾することである。
- ・主節との意味関係の典型的なものは、「付帯状況」「時・場合」「原因・理由」「譲歩」「条件」の5つであるが、実際には接続詞が無いため曖昧かつ複合的になる傾向があり、これが分詞構文の存在意義のひとつと言える。
- ・分詞の置かれる位置は①主節の前②主節の中③主節の後であり、置かれる位置やカンマの有無によって意味関係や情報の焦点が変わってくる。
- ・不定詞付きの分詞構文、懸垂分詞、独立分詞構文など基本形から外れた用法が多くあり、文法的な寛容度・許容度の高い構文と言える。

NOTE

- (1) 分詞構文は接続詞や主語が無く、動詞の時制も考慮しない簡潔な表現である。接続詞が無いことで主節との間に複合的な意味関係が生じ、主語が無く、動詞の時制を考慮しないことによって、情景描写をする際に、まわりくどくない簡潔さや出来事の変化の速さ、そして時には切迫感などを表現することが出来る。よって、小説や新聞英語などでは多くみられるが、主節との意味関係の曖昧さから口語表現では避けられる傾向がある。分詞構文には以上のような文体論的考察も可能であるが、本稿では意味論的、統語論的、語用論的考察を中心に進めてゆく。
- (2) British National Corpusより採取した例文。本稿の例文の全てがBNCからのものである。BNCとはオックスフォード大学出版局が中心となって作成した現代イギリス英語（口語、文語の両方を含む）のコーパスである。詳細についてはインターネットの以下のアドレスより入手可能。<http://www.natcorp.ox.ac.uk/>
- (3) Whichの非制限的用法にも下記のように前文の内容をうける用法がある。

You went away when Captain Smollett was wounded, which wasn't a brave thing to do.
(BNC)

(君はキャプテンのスモレットが怪我をした際に、立ち去った。それは勇敢な行為とは言えない)

REFERENCES

- Ando, S (安藤貞雄) 2005. 『現代英文法講義』 東京：開拓社.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Jespersen, O. 1909-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7vols. Copenhagen: Munksgaard. Heidelberg: Carl Winter. London: George Allen & Unwin.
- Oe, S. (大江三郎) 1983. 『動詞(II)』 講座学校英文法の基礎5. 東京：研究社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.